日本医史学雑誌第三十六巻第三号
平成二年七月三十日発行

医史学と私

梶田　昭

こういう題で御依頼を頂いて光栄に思った。同時にもう回顧という歳かと驚いた。医史学への関心は、私にとって、いつも医学への関わり合いの一部であった。そこで「医史学と私」は私の医学生活を語ることになる。恥を顧みず、駄文を草する次第である。

一　卒業前後――病理学入門――

東大医学部へ入ったのは一九四二年であった。厚生省の委託生として学資を頂いた縁で、厚生科学研究所（公衆衛生院）の柳沢謙、益子義教先生らに結核の集団検診に加えて頂いたり、結核研究所で岩崎龍郎先生に気管支・肺血管のトレースを教わったりした。

四五年の三月、仮卒業になり、鈴木遂教授、三宅仁助教授（当時）の許可をえて、同月二十六日から九月まで病理学教室へ通った。

最初の解剖（四月一日）がじつにトク・ベルツの御遺体であった。江頭靖之先生のお手伝いをした。その五、六年前、ベルツ博士が「父となりぬ。妻花は余に一男児を贈った」と書いた、その男児である。いま剖検記録をみると、「死後五二時間三〇分」とあり、その頃の状況が思い出される。空襲下の東京で断水が続き、交通もままならぬ日々だった。

一昨年（八八年）七月、たまたま友人、鈴木圭介（歴史学者、元東大教授）・三枝子（箕作元八の孫）夫妻らと、ベルツ夫人花さんの菩提寺、豊川市西明寺を訪ね、住職の永田鈞山、副住職の恵照氏からお話を伺う機会があって、この解剖を思い出した。

話は戻るが、四五年八月二十四日には、原子爆弾による死亡例の解剖があった。広島で被爆された、移動劇団の女優さんで、三宅助教授が執刀された。数年前、劇団の記録が本（『桜隊全滅』未来社）になったとき、資料を提供した。八月末から九月初めにかけて東大の調査団のひとりにして頂き、宇品で原爆死の剖検を二〇例ほど経験した。この調査団については『最新医学』二〇巻、九号の座談会で三宅先生が話されている。

病理学教室の在籍は短期間であったが、剖検の技術を身につけることができたし、松本武四郎、諏訪紀夫先生に出逢ったことも、貴重な出来事であった。

二　足尾銅山

正式に卒業したのは一九四五年九月。物療内科を経て、翌四六年の七月、古河鉱業・足尾鉱業所の附属病院に赴任した。東京は焼け野原だったし、鉱山という未知の世界にひかれるものがあった。物療内科から、すでに蓬来信勇氏が内科医長として赴任されていた。

金属鉱山の珪肺について多少の予備知識を持って行った。思いがけないことに、毎日の診療では腹痛が多かった。あれは回虫のためだったのか、一日に一〇件から二〇件、坑夫社宅を、痛みどめの注射をして歩く日が続いた。

珪肺については、本山分院の小林袈裟夫先生が長年こつこつ診療され、資料もお持ちであった。私たちは、その年の八月に珪肺の剖検第一例を経験し、十二月から翌四七年初頭にかけて、珪肺の集団検診を実行したが、こういうことが出来たのは、当時の社会情勢（会社も労働組合も協力してくれた）もさることながら、小林先生の蓄積が力になった。

私は四七年四月、第二回産業医学会（京都）で集団検診の成績を発表した（「足尾銅山における珪肺罹患の実態」『産業衛生』二巻二号、一九四七）。暉峻義等先生も足尾に来られた。通洞駅からの先生の電話を、夕方、病院で受けて驚いた記憶がある。剖検は、二年間に六例（珪肺は五例）経験した。解剖用の刃物は町の金物屋で調達した。ミクロトームや染色剤を苦労して整えたが、ついに組織標本は一枚も出来なかった。

四八年七月、私は清瀬の国立東京療養所（東療）に移った。四九年春の日本病理学会（福岡）で「珪肺症に関する病理学的研究」を発表した。このときは伝研の草野信男先生にずい分お世話になった。数年後からは、労働省で組織した珪肺の班研究の委員になった。私は主に、珪肺と結核の関連に興味をもっていた。「珪肺と結核」『日本臨床結核』八巻（一九四九）は、この方面の私の処女作であった。

三　清瀬村の九年間

上京して間もなく、いきさつは忘れたが、星野芳郎氏を介してアグリコラの『デ・レ・メタリカ』を借用した。どなたの蔵書だったのか、いま思い出せない。私は「珪肺の歴史」を『科学史研究』に投稿することになった。その前に科学史学会の例会で発表するようにいわれ、会場の岩波書店へ出かけていった。記録によると、それは五〇年二月二十五日のこと。私は出席者に菅井準一氏のお顔を発見しておおいに緊張した。その約一〇年前、旧制浦和高校の生徒として、私はこの『科学史の諸断面』の著者の講演を拝聴したのである。「珪肺の歴史」は、『科学史研究』第一五号（一九五〇）に掲載された。

『科学史研究』第二〇号（一九五一）には「看護の歴史」を発表した。

東療は砂原茂一先生が所長だった。当時の清瀬では、宮本忍、北錬平、島村喜久治氏らが活躍されていた。『健康会議』という雑誌が発刊され、私も「足尾銅山」（一九五〇・五）、「アフターケアの現状」（五一・一二）、「日本の結核患者」（五

二・三)、「日本の結核百年史」(五三・一および二)などを書いた。島村・宮本監修『結核の事典』(筑摩書房、一九五三)には「結核をなくすために」の章を分担した。

四九年、肺切除術が始まった。江波戸俊弥君と共同して切除肺を調べ、結核の主病巣が濃縮空洞という形で長期に推移することを観察した(『日本臨床結核』九巻、一九五〇)。

『科学史研究』の縁では、星野氏のすすめで『科学技術史年表』の作成に参加した。私は二〇世紀医学史を分担した。年表は、平凡社『理科事典』第一九巻(一九五三)となり、のち単行本(五六)としても刊行された。

その頃『科学の学校』(岩波、一九五四)にも結核症の項を執筆し、リッチ『結核症の病理発生論』の翻訳(隈部英雄訳、岩波、五四〜六)を、北先生と一緒に手伝った。五六年ころから、私は療養所を辞めるつもりになった。今の衣を脱ぎすてよう、と決心した。そのあと、「社会」という言葉の呪縛からだんだん離れたので、あるいはこれが目指したことだったのかもしれない。

「療養所からみた結核の問題点」『日本医事新報』一七〇〇号(一九五六)を書いたのが最後になった。また以前から書きためてあった「珪肺と結核」を、『結核選書』の最終巻として、医学書院から出版(一九五七)することができた。砂原先生は出版を斡旋して下さったばかりではなく、長文の紹介を『医学界新聞』四月二十九日号に執筆して下さった。

四　東北大学医学部・労働省

五七年の四月、東北大学の研究生として赤崎兼義教授の病理学教室に入れて頂いた。私は三十四歳になっていた。偶然であったが、同じ四月、岡本耕造教授の後任として、駒込病院から諏訪先生が来られることになっていた。

すべてが新しい世界であった。ビュヒナーの『一般病理学 Allgemeine Pathologie』が私の愛読書になった。職業としての病理学で、腫瘍病理学(いわゆる組織診断学)の比重が大きいことに驚いた。

珪肺については、三菱の尾去沢、生野鉱山から教室へ標本が送られてくるので、その検索をいいつかった。「珪肺症の進展について」『最新医学』一四巻（一九五九）は、私がはじめて顕微鏡をのぞきながら考え、考えを自分の言葉で表現した論文である。

六〇年の結核病学会で、赤崎先生が「肺線維症」の報告をされることになり、肺線維症の概念の発展過程を調べていた。その前後から、私は諏訪先生の論文を読む機会がふえた。しかもそれに関連して、先生の考えを毎日のように伺える、という幸運に恵まれた。病理学に「方法」を感じたのはそれが始めであった。「方法」とは、内部にひそんだ歴史であった。諏訪先生には、のちの『器官病理学』（一九六八）の第一章「器官病理学の基礎理論」の原形にあたる草稿も読ませて頂いた。松本武四郎先生にも別刷を頂いたが、そのころ読んでとくに感銘深かったのは、次の二論文である。

Suwa, N.: Die morphologische Grundlage des nephrotischen Syndroms. Acta Path. Jap. vol. 5 (Suppl.) p. 381, 1955.

Matsumoto, T.: Über einige Erscheinungsformen der intrapulmonalen Zirkulationsstörung. Acta Path. Jap. vol. 7 (Suppl.) p. 499, 1957.

六〇年四月、労働省の労働衛生研究所へ移った。珪肺で古いお付き合いの先輩、坂部弘之博士が呼んで下さった。同時に、松本教授の御配慮で、東京女子医科大学の非常勤講師にして頂いた。一年のち、女子医大へ正式に移籍した。動物実験より人間を対象にしたかったし、塵肺だけではなく、生理・病理の機構を広く扱いたいと思ったのである。

しかし生理・病理の機構といっても、手段は病理解剖しかない。当時、手段の制約には思い至らなかった。松本・諏訪病理学の魅力はそんなにも強かった。

五　女子医大の日々に――『小病理学』・『細胞病理学』――

一九六四年に、第二病理学教室を主宰することになったが、慢性の人手不足で、解剖と講義に追われる日々であった。一九六〇年から八七年まで、女子医大の病理解剖は一〇三七一体、私がメスをとり、記録したのは、うち九五一体であった。

六九年に「臓器体制と病変」一　肺、二　心・血管、三　消化器を『臨床科学』に、七二年に「血液の病理序説」、「構造としての脳」を、『生物科学』に書いた。七五年には、「東西医学を結ぶ会」で「水の病理学」を話した（『東洋医学』四三号）。三木成夫教授、伊沢凡人博士の御紹介による。これらは『小病理学』（南山堂、一九七八）の基礎になった。ささやかな本だが、この「私の病理学」を書くのに（仙台から数えて）二〇年かかったことになる。

七四年五月から七八年七月まで、九回にわたって「医学史おぼえがき」を『病体生理』に連載した。旧知の伊藤一良氏の御依頼であった。一「ヒポクラテスの周辺」、二「魔法と科学と」、三「種子島から解体新書まで」、四「ルネサンス・一七世紀」、五「一八世紀」、六「細胞病理学以前」、七「ウィルヒョウとの想像的対話」、八「病気の生物学序説」、九「病気の生物学序説（続）」、という順だった。モチーフは必ずしも一貫しなかったが、よい勉強になった。

この別刷をお送りしたのが縁だったと思うが、川喜田愛郎先生に、ヒポクラテス、モルガーニ、ボネ、フェルネルなどの原著を見せて頂いた。これは驚異であった。医学史は、原典を読んだ分しかほんとうの勉強にはならないらしい、と感じとった。

七八年から二年間、諏訪先生が客員教授として来られた。ちょうど『病理形態学原論』（一九八一）をお書きになった時期だったので、私も門前の小僧として、構築の幾何学をかじらせて頂いた。ルイスの論文（Lewis, F.T., Proc. Amer. Acad. Arts Sci. 68, 251, 1933）で、nuclear territory という言葉を見て気付いた。シュヴァンは細胞を核テリトリーと

して定義した。これに対して、ウィルヒョウが細胞テリトリーといったとき、その目は組織を見ている目、多細胞体制を見ている目であった。だからこそ「組織説に基礎をおいた」細胞病理学なのであった。

私は「組織単位の形態について、一、二、三報」(『東女医大誌』五〇巻、一九八一、および五一巻、八二)を書いたが、三報では、ビシャとウィルヒョウが、いかにそれぞれの方法で「病気を空間化」(spatialiser la maladie)したかを述べた。私にとってこの論文はなつかしい。

八二年ころから『科学医学資料研究』に、ウィルヒョウのこと、古典の紹介、細胞病理学のこと、ビシャ「諸膜論」の訳など、投稿の機会を与えられた。また八二年には、雑誌ＯＭＲ(オリンパス)に「近代病理学の成り立ち」という一文を草した。たしか酒井シヅ先生の御推薦と聞いた。

『講談社・医科学大事典』(一九八二～八三)にはアルチュス他九項目、『小学館・日本大百科全書』(一九八四～八九)にはアショフ他一二項目を担当した。

八二年の冬、小川鼎三教授から、谷口財団医史学部門の国際シンポジウム(裾野、八三年九月)のお誘いを頂いた。Rudolf Virchow and his successors(ウィルヒョウとその後継者たち)というタイトルにした。科学史学会に同じ題で発表して(三〇回例会、八三年五月)考えをまとめることから始めた。その他の準備のことは「病理学史の一断面」(『生命の科学』中山書店月報、八六年十一月)に書いた。シンポジウムの公式記録は谷口財団から出版されている。

シンポジウムの翌年、『細胞病理学 Cellularpathologie』(初版)を翻訳し、川喜田先生の御好意で出版もできた(朝日出版社、一九八八)。翻訳から出版まで日数がたったので、ちょうど定年の記念になった。

六　記号論としての病理学

八七年六月、「疾病観の変遷―一病理学者の目」と題して科学史学会(三四回例会)に発表した。講演要旨集からその

大要を転載する。

戦争で中止された日本病理学会（一九四四）は、鈴木遂「腸チフスの病理」が宿題報告として予定されていた。鈴木は敗戦の翌日に他界したが、門下としてその仕事に参加した人々は、戦後の病理学の指導者になった。そのひとり、諏訪紀夫は、一九五四年の論文「血漿蛋白の病理学的解釈」（『最新医学』九巻六号）の中で、「病気が理解されるという事は病的なものが生理的なものに還元されるという事にならざるをえない」、「病気による差別というものはその意味が理解されただけ消失して行く」はずだ、と書いた。病気は「それぞれの分化を示す細胞群の、条件に対する態度」に帰着する。――いわゆる生理学的医学が、ontological な疾病観とはっきり一線を画して主張されたのは、わが国ではこの論文が最初であろう。ところでもうひとつの病理学があった。岡治道、隈部英雄らは、東京市立結核療養所で多くの結核屍を解剖し、成人肺結核症の発生機序を明らかにした。岡とその門下の人々は、最後まで結核の専門家であった。結核を専攻した人の中から、たとえば肺ガンの専門家が生まれた事例はあるが、それは近接の領域への乗りかえにすぎない。ウィルヒョウが結核結節をひとつのいとぐちとして結合組織を研究し、ブラステーマの否定へと進んだ道は、わが結核病理学からは開かれなかった。――ひとつは急性、他は慢性の感染症であるが、このような素材から出発して、その歩みの中で違う態度を生み出していった。それは素材だけのことではなく、研究者の個性によるところも大きいだろう。いずれにせよ、それは、戦中・戦後の日本病理学史の一事実である。――急性病は、そのはっきりした指標性（好発季節、症状、経過）によって、シデナム以来、ノソグラフィーの好適な対象であった。慢性病のノソグラフィーははるかに困難で、病理解剖の手法を用いたパリ学派によってはじめて形が整ったが、急性病に比べて恣意性の強いものであった。上述した病理学の二つの傾向の違いが何に基づくのか、その意味を考えてみたい。

長い引用になったが、およそこんなことであった。八六年の冬から言語学の本に親しんで、それがこういう扱いのきっ

かけであった。結核は概念をとり囲むコノテーション、社会の先入観や設備投資が、生理学を生みにくくしたのではないか、と考えてみた。

同年七月に、私は綜説「記号論としての病理学」を書いて『東女医大誌』に投稿した（同五七巻、一九八七）。もう一度、機会（学内病理談話会、十一月七日）があったので、「ことばと病理」と題して話をした（抄録『東女医大誌』五八巻、三六九頁）。

八七年秋、秋山房雄先生が、富永半次郎『正覚について』を届けて下さった。その御好意はありがたかった。思えば松本、諏訪先生を始め、富永先生ゆかりの方々に、私はなんと多くのことを教えられ、しかも少ししか学ばなかっただろう。

八八年三月に定年退職した。長く仕事の場を保証して下さった東京女子医大（吉岡博人理事長）には深く感謝している。

七　定年後――エプシュタインのこと――

同年四月から、実践女子大学（家政学部）、東洋鍼灸専門学校で講義をすることになった。さしあたり医療機関との関係がうすくなって、医学文献の面では不便を感じていた。そんな折、時空出版から、エプシュタイン『旧約聖書の医学』、『新約聖書とタルムードの医学』を訳さないか、というおすすめがあった。買って、書棚で眠っていた本である。聖書に親しむ絶好の機会と喜んで、あまりためらわずに引き受けた。退職の直後にそういう話があったことが、不思議な縁とも幸運とも感じられた。

エプシュタインは、旧約聖書についてはカウチュ訳を用いている。私は日本聖書協会の口語訳、新共同訳を利用した。ドイツ語訳と日本語訳の対応は、医学用語だけ見ても、不都合があることに気付いた。ヘブライ語、ギリシア語とも比較し、楽しい作業に熱中した。たまたま医史学会から発表のお誘いを受けたので、「旧約聖書の医学用語について」と題し

て、八九年二月の例会で報告した。

『旧約聖書の医学』は訳し終えたのが十二月八日、見直したり、訳注をつけたりして、訳稿を編集者に渡したのは、年が明けて八九年の四月六日、本が完成したのは同年十月末であった。『新約聖書とタルムードの医学』はいま進行中である。私はこの仕事をきっかけにして、定年後の新しい、自立の生活へなんとか移行することができた。その間、立川中央病院、みさと健和病院からも応援して頂いた。

お世話になった恩師、先輩、友人で、すでに世を去られた方も多い。いま心から感謝の意を捧げ、御冥福を祈って筆をおく。（一九九〇年二月二十七日）

（東京女子医科大学名誉教授）